『ナビゲート！ 日本経済』

脇田 成 著（首都大学東京経済学部教授）

◎評者 井堀利宏（東京大学大学院経済学研究科教授）

日本経済の病状診断と処方箋 巧みに比喩使い手際よく

本書は、日本経済を患者にたとえて、名医である著者がその病状を説明するとともに、処方箋を示すことで、日本経済という患者を手際よく診察している。すなわち、日本経済の変動を「一時的な風邪」「慢性病」「老化」にたとえて分類し、それぞれに適した治療法が必要であるとして、それぞれの症状について、簡潔かつ適切な診断をしている。特に、景気変動を病状にたとえ、日本経済のデータを体質にたとえるなど、一般読者に分かりやすい工夫が随所に見られる。それでいて、著者の最先端の研究成果も重要なポイントでは織り込まれており、単なる解説書のレベルを超えた日本経済の分析書としても、一流の仕上がりを見せている。

なかでも、金融政策、金融システムに関する描写は興味深い。第4章では、わが国の「失われた10年」と呼ばれる1990年代からの低迷に金融政策がどのような役割を果たしてきたのかを批判的に説明している。また、2008年秋以降の国際金融危機が生じたメカニズムについても、人口面での成熟が国際間で異なることがその背景にあると説明しているのは、面白い。低金利政策が有効性を失ったこと、グローバル化が情報の非対称性を伴うこと、小泉改革がリハビリを軽視し格差を増大させたことなど興味深い指摘も多い。

こうした解説では、難解な金融、マクロ、ミクロの専門用語や概念を用いざるを得ないが、著者は、デパート商品券、レンタルビデオ業界など斬新な比喩を駆使して、イメージ戦略で直感的に説明しており、読者の興味を引きつけることに成功している。新書という限られた分量で豊富な内容が展開されており、手際のよさで見ても、実にお買い得感の高い書物である。

ただし、診察の歯切れよさと比較すると、処方箋に具体性、独創性があまり見られないのが残念である。最後の章で、政策提言として、家計に所得を返し、少子化対策を充実するという結論を出しているのは、もっともらしいが、その具体案、効果が議論されていない。また、読者を引きつけるサービス精神のあまり、論理的に甘い点も見られる。例えば、アメリカが世界一人口が若く、成長可能な国だろうか。また、民主党の政権公約をばらまきと批判する一方で、10兆円の子ども手当を提唱しているが、その財源はどうするのかなど、財政面での裏付けが物足りない。しかし、そうした危うさが本書の長所に見えてしまうほど、読むものを引きつける不思議さのある本でもある。

ちくま新書
798円

『若者と初期キャリア――「非典型」からの出発のために』

小杉礼子 著（独立行政法人労働政策研究・研修機構統括研究員）

著者によれば、「子供が正社員である場合の世帯収入は600万円から800万円台をピークにした分布であるのに対して、子供がニート状態である場合は、およそ300万円台がピーク」である。またニート状態の若者の約4分の1が中学卒の学歴であり、大学・大学院卒は約1割に過ぎない。

フリーターに目を転じてみよう。実は彼らの多く（80％）は20代後半には正社員へ移行している。だから若いときに「定職を持たない」ことはそれほど心配

勁草書房
3360円

手記が語る林芙美子が見た戦争の真実とは

末國善己（すえくによしみ）（文芸評論家）

桐野夏生『ナニカアル』は、戦時中に南方へ派遣された林芙美子が書いた架空の手記を紹介するという形式を用い、芙美子の実像に迫っている。

芙美子は反戦主義者ではないが、自分が見たままの戦争を書いたため、日本の行動を正当化し戦意高揚を求める軍と対立する。軍に監視され、表現を規制されながらも、書きたいものを書く道を模索し続けた芙美子には、著者の作家としての決意が重ねられているようにも思える。国家が強権を発動し、それに国民が

新潮社
1785円

なことではない。しかし、移行するには景気動向も重要で、「学ぶ能力」や「同じ職場での継続」といった条件が必要なようだ（といっても長すぎるフリーター歴もまずい）。また、その資質の獲得は「学歴」とかかわっている。

こうした数字は当然、予測されていたことである。しかし改めてデータで問題の所在を指し示されると、「貧困が貧困を再生産する社会構造」に暗澹とするのである。

本書は「新規学卒就職して正社員として定着する」という「典型的キャリア」から外れた若者の、外れてしまった理由や、その後の正社員への「軌道修正」のきっかけ、条件を丹念に探索したものだ。背後に浮かび上がってくるのは、貧困からの脱出と、それに手を差し伸べるための仕組みづくりの困難さだ。

著者は「自己責任を説くよりも、まず学び直すことのできる環境を整えることの方が重要だ」という。なるほどそうかもしれない。だが、現在でも職業教育・訓練の施設は結構あるが、彼らはそれになじむだろうか。

労働問題の専門家、熊沢誠氏や海老原嗣生氏は、「非典型」を生きる若者（人々）に、「典型への道」を歩むことを勧めるのではなく、非正規雇用のままでも尊重される社会の必要性を提起する。これは本書の著者と

「典型」から外れた若者の実態
丹念な探索で浮き彫りに

◎評者　中沢孝夫（福井県立大学特任教授）

は大きく異なるところだ。

評者にはどちらがよいのかの判定能力はない。評者はしっかりしたデータは持っていないが、昔から若者は転職したし、最初の職場が最後の職場であったのは、せいぜい男子大卒の一部でしかなかったのではないかと思っている。だから今日、ニートやフリーターがいてもやむを得ないといった気分もある。

とはいえ、「貧困の再生産」が構造として定着するのはやはり危険だ。それは単に「福祉の増大」という社会的なコストだけではなく、社会の安全ともかかわっているからだ。それゆえ著者のデータに裏打ちされた、一貫した「初期キャリアの研究」の持つ意味は大きい。

時代小説

同調すれば表現の自由など簡単に吹き飛ぶ危険があるので、芙美子の苦悩は戦時中の特殊事情とは思えない。

その芙美子を通して、占領地で横柄な軍人や、現地人を搾取してぜいたくする日本人の存在を暴いており、先の戦争に本当に大義があったのかを考えさせられる。

南方で愛人と逢瀬を楽しむなど、芙美子の自由奔放な生き方は批判を浴びるが、その多くは、女性を都合よく管理したい男性の偏見から生まれた誤解であることもよく分かる。

西木正明『ガモウ戦記』（文藝春秋、1500円）は、南方から引き揚げ、恩人の軍医の招きで秋田の寒村で暮らし始めた紙芝居師・蒲生太郎を主人公にしている。

戦争未亡人の敏子と同棲を始め、娯楽の少ない村人に紙芝居を見せることで認められた太郎は、村の何気ない生活を絵に残すことを生きがいと考えるようになる。

太郎や村人は物質的に恵まれてはいないが、夜な夜などぶろくを酌み交わし、好きな異性とむつみ合うなど満ち足りている。理想的なスローライフを送る人たちを見ていると、本物の〝豊かさ〟に魅了されてしまうはずだ。

※この欄は「野崎六助のおすすめミステリ」と隔週交代で掲載します。